

数千年人間と共に存してきた植生、私達の生命を支えてきました。しかし、豊かな生活の追及をし続けてきた人間活動は、植生の変化と消失に加え全ての生物の生存環境を危い状態の方向に進行させています。

このような生活環境の悪化に対応するためには、まず、私達一人ひとりが生活している地域の生活環境のあるべき姿をしっかりと認識することだと思います。そのうえで多角的な対策を施した総合的な自然環境管理を進める必要があります。このことによって、はじめて、自然と調和のとれた人々の生活が可能となり、末長い生活の安定と安全が保障されるのだと思うのです。これまでの自然との対決的行為を改め、自然と共に存、共生していく行為が望まれます。

一人ひとりが健康で幸福な生活をおくるために、このかた数百年地域の人々と共に存してきた「ふるさとの樹」による緑化をすすめたいものです。ふるさとの樹による緑化、それは、地域固有の潜在自然植生の構成種を使いきつてのふるさとの森（タブ・シイ・カシ・ブナ等の森）づくりです。

生きている森、生物集団の「生の営み」を見・感じ・触れる中で新しい文化を創造する潜在基盤を残すことになる。古くて新しい森を育て、かけがえのない地域の自然を守り、残し、伝えたいものです。

昭和59年4月、三島郡与板町立与板小学校の「学校環境保全林の形成」（ポット苗0.5~1.0M）使用、が実践されて8年が経過しました。郷土色豊かにすくすくと生長し理想的なふるさとの森の完成が真近です。本物のみどりの中で生活し、学習に励む子供たちは「命をかけて営み続け

新潟県山野草をたずねる会々長
小日向 孝

新潟県山野草をたずねる会機関紙
第6号
会員数70名(12/1現)
事務局
長岡市下条町1406-6
印 刷
(有)佐藤印刷所
TEL 32-0681

— 与板小学校学校環境保全林の
(ふるさとの森)生長 —

〈凡 例〉

- ▲ アラカシ
- △ ウラジロガシ
- ◎ スラジイ
- シラカシ
- タブノキ
- アカガシモガシ
- シロバメガバキ
- ヤブツゴ
- ソヨゴ
- アセビ

植栽時の学校環境保全林
S.59.4.27.(ふるさとの森)

植栽8年目 平.3.10.

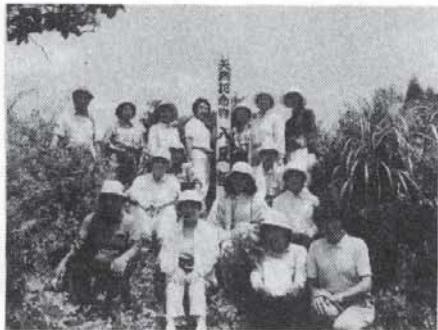


ている樹々」をみつめ、考え、味わっています。また、知性と感性と体験の教育を受ける中で地域の自然をより正しく理解しあるべき生活環境づくりの意志決定のできる子供に育つてもらいたいと思います。

植栽当時の地域住民の疑心暗鬼の気持ちも本物のふるさとのみどりに感嘆しています。地域固有のみどりの回復＝ふるさとの森づくりとして、生物社会の秩序にそって、植生学と生態学的に充分な現地踏査・研究を基盤に計画した植物社会学的手法をもつて実施された好例であります。

与板小学校のふるさとの森の樹々は図のよう確実な生長をしています。

'91・夏の合宿研修 — 北蒲・飯豊方面



夏の合宿研修は7/27~7/28にかけて行われた。参加者19名でや少なかつたが、天候に恵まれ有意義に研修が行われた。主なコースは、天然記念物の八反ガヤの観察、胎内ファミリーパーク、大長谷小学校の花壇、赤芝峠の渓谷の観察、飯豊山のブナの原生林、イシコロ沢の雪渓と周辺植生の観察であった。

めざすは大雪渓

佐藤春子

民宿での夜の宴会はウサギ汁に山の幸、飲むほどに酔うほどに宴もたけなれ、最後は皆で踊って締めくくる。露天風呂につかり昼の疲れをとり早々眠りについた。翌朝激しい雨音に目をさます。おいしい朝食をいただき民宿をあとにし、めざすは大バノラマ夏山の大雪渓と夢はふくらむばかり。林に囲まれた広い道も徐々に狭くなり岩場があり川あり登りに下りに途中の景色もほどほどにただ前進。ハアハア言いながら枝につかまり一步一歩登る。この坂を越えたなら大雪渓が待っていーる」と替え歌を口づさむ。登れども登れどもなかなか見えない。"そうだ引き返す勇気こそ大事なんだ!なんて言葉も頭をよぎる。二、三メートル進んで休む状態が続く。「もうすぐですよ、頑張って。」行きかう人の声援に励まされ腰をまげ膝に手をかけ歩き続ける。「見えた!」一斉に顔をあげる。なんとも言えない満足感がこみあげてきました。シラネアオイの群落に囲まれおにぎりを食べながらしばらく山の美しさに見とれていました。帰りは足どりも軽く待っている皆さんにVサインをして下りてきた。風呂で汗を流しビールを飲んで「ああなんと幸せ!」一泊二日が一瞬に終った研修旅行、心に残る旅路でした。

— 平成3年度活動報告 —

☆テーマ 植物の生きざまに学ぶ

1. 「早春の山野草を訪ねる会
並びに総会

 - 方面 西山方面
 - 時期 3月31日(日)

2. 春の野を歩き山菜を食べる会

 - 方面 東山方面
 - 時期 4月28日(日)
 - 方面 東山方面
 - 時期 5月12日(日)

3. 山野草の育て方講習・
交換会および観察会

 - 方面 ファミリーランドの
キャンプ場
 - 時期 6月9日(日)
11:00~15:00

4. 夏の植物観察兼合宿研修会

 - 方面 山形県 飯豊山
 - 時期 7月27日(土)
~7月28日(日)

5. 秋の野に学ぶ会

 - 方面 長岡周辺
 - 時期 10月10日(木)
 - 方面 魚沼方面
 - 時期 10月20日(日)

6. 山野草を語り
活動を反省する会

 - 場所 かも川別館
 - 時期 12月7日(土)

7. 機関紙の発行 第6号

 - 時期 12月7日(土)
 - 内容 活動のあしあと、
雑感など

飯豊登山

平井信次

飯豊山は信仰の山としての歴史は古いのですが、大倉尾根登山として樂園に登りつくには、相当の覚悟をしなければならない。荒天候やガスの深い時には、特に方向を誤らないように注意することが必要である。

飯豊荘の駐車場から出発するにあたり、小日向先生から午後一時までに帰ってきて下さいとのお話をあった。

イシコロ沢を頭に描き、心を踊らせながらブナ林の暗い中に吸い込まれて行く。今にも雨が降りそうな様子、とうとう雨になった。皆さんは思い思ひの雨具を取り出し、雨の中を沢づたいに歩く。

やがて、急傾斜となり、沢止めのような場所に着く。そこは、上高地の大正池のような所で大木が湖より半分位出ていて、雨の中に幻の木立が突然現われた。しばし、その風景の中に立たずんでいたが、また足を進める。

度て来たので帰ることにした。今、思い出して、本当に良かったと思う。あの沢でコースをはずして、急流を手と手をにぎってやっとの思いで渡つたこと。

思い出の一ページです。皆様方、本当に有難うございました。

の様子を見ると、登りに精いっぱいで植物には目がいかないようである。ようやく大雪渓が眼前に現われた時の感動は、言葉に言い尽くせない。花崗岩が灰色に染っていた。

五七十メートルの雪渓が何重にも重なり合つてできいて、ものすごい層になつていて、

飯豊山の思い出

江口洋子

山が大好きです。花や木や草も好きだけど名前も知らないし、名前がわかるのに自生しているものを見た事がない、そんな私の希望を可能にしてもらえるこの会は、とてもありがたいのです。

少しづつ、一所懸命に覚えてゆきました。飯豊は本当に「山奥なんだナ！」と思いました。宿のスグ前にある山々、後も川と山が連なる。道路も終点。「この宿の人はどうして生活するのかな」とかいらぬ事も考えたりして夕食前の一時を四人で散歩に出ました。少し歩いただけで、音は私達の話声とセミや鳥、川の音だけなのです。ワラビが取れるのに赤トンボもいました。のりうつぎ、エゾアジサイ、ヒキオコシ、アケビ、マタタビみたいなサルナシ、とか教えてもらいました。木の名前が少しも覚えられません（スマセ、研修旅行なのに）夕食はおいしかったけど、お汁だけは、ダメでした。夜も静かで道に灯もなく、昔の夜の暗さを思い出しました。熊狩りはビデオで充分ですが秋のマイタケ取りには、参加したく思いました。サルナシをもらいました。キュウイそつくりです。味もズッツも断面も。飯豊のサルナシとマイタケを思い出しました。ありがとうございました。



大雪渓を背に

大雪渓と高山植物

小幡和雄

今年は仕事が忙しく、この会にはなかなか出席できませんでしたので研修旅行がとても楽しみでした。何と言つても真夏汗だくなつて登つたところにある雪に触れるというのも最高の楽しみです。

と中、雨に会いましたが後半には晴れきました。両手を使いながら登らなければならないわしい道も多かったです。ですが、雪に触れてみたい一心で登り続けました。日頃いかに運動していないかがいやというほどわかります。角をまがつたら顔前がパッと開けてすっと遠方に大雪渓が姿を現わしました。ユキワリソウ・カンゾウの花が雪渓の霧の中に見える様子はすばらしいものでした。心も体もリフレッシュした瞬間でした。

気分は登山家

阿部美智子

七月二十八日飯豊山の大雪渓の前に立つ感激は、昨日の事のように心によみがえってくる。前日は民宿での野趣ゆたかな料理に銳気を養い明日に備える。翌朝早く宿を後に一路目的地めざし出発、雨天のせいかうとうしいまでの最高の楽しみです。

と中、雨に会いましたが後半には晴れました。両手を使いながら登らなければならないわしい道も多かったです。ですが、雪に触れてみたい一心で登り続けました。日頃いかに運動していないかがいやというほどわかります。角をまがつたら顔前がパッと開けてすっと遠方に大雪渓が姿を現わしました。ユキワリソウ・カンゾウの花が雪渓の霧の中に見える様子はすばらしいものでした。心も体もリフレッシュした瞬間でした。

人、まだまだ足早に下山する人、何度も引き返そうかと立ち止まるが、春子さん、今井さん、大浦方さん、と最初の雪渓までがんばろうと励まし合いました。心も体もリフレッシュした人には四人!!

第一雪渓で引き返そうと思った処で、どなたかが、あの雪渓の雪が食べたい、の一言に励まされて、目的地迄、行って参りました。振り返って、山越え、谷越え、言葉の通り、良く頑張ったもの……、登りには見えなかつた小さな草花にも目が行き、お土産の大きな雪のかたまりをリュックにつけて、解け出した雪でお尻を濡らし乍ら、『ヤッタ！ヤッタ！未だ未だ元気印だ！』と遠い昔の娘に返った気分で、充実した夏日の思い出を作らせて頂きました。とても幸せを感じて居ります。チャンスを下さいました皆様に心よりお礼申し上げます。

本当に、ありがとうございました。

飯豊山一泊研修に参加して

吉田イネ

娘の頃に返った様な気分で、一泊研修をさせて頂きました。今思い返しても、胸踊る心地が致します。

第一日は快晴、飯豊登山当日は、残念乍ら、生憎の天気になりました。洋傘をさした人、完全武装の人、それぞれ思いを込めて、登り初めました。

簡単に考えて居りましたが、雪渓のある山は、やっぱり違う。みんな、元気で登り始めましたが、普段の運動不足にちよつと加令が重なり、五合目八合目に一人減り一人減り、第二雪渓迄行つた人は四人!!

第一雪渓で引き返そうと思った処で、どなたかが、あの雪渓の雪が食べたい、の一言に励まされて、目的地迄、行って参りました。振り返って、山越え、谷越え、言葉の通り、良く頑張ったもの……、登りには見えなかつた小さな草花にも目が行き、お土産の大きな雪のかたまりをリュックにつけて、解け出した雪でお尻を濡らし乍ら、『ヤッタ！ヤッタ！未だ未だ元気印だ！』と遠い昔の娘に返った気分で、充実した夏日の思い出を作らせて頂きました。とても幸せを感じて居ります。チャンスを下さいました皆様に心よりお礼申し上げます。

飯 豊 の 宿

池 田 保 子

平成 3 年 12 月 7 日

国道 113 号線の赤芝峠を離れて、山路に入る。大きなブナ林や唐松の木が繁り、深い川がむこう側の山との間を流れている。ゴツゴツした頂が日に入り、後方に消えていく。車は、川沿に奥へと進む。道も次第に細く、険しくなる。この先にどんな宿があるのか、こんな所でどうやって生活していくのかを考えると、まるで別世界に入っていくような不安と期待があった。

しかし、車を出迎えてくださった宿のおばさん、息子さんの笑顔に会った時、まるで以前から知っている人に会つたような、心の安らかさを感じ、ホッとしたようと思われた。

家中を開け放ち、涼しい山風を入れ、明りを付けた居間には、この家の古い歴史の跡が見えた。太いはり、高い天井、ピカピカにみがかれた戸や家具、熊のなめし皮、大きな舞茸を手に喜ぶ人や山羊と一緒に家族の写真。どれも山の厳しい生活の中で、大切に育まれてきた愛情が感じられた。

「冬場も山に居るんですよ。」と二コニコ顔で話していたおばさん。深く積つた雪の中での生活を思う。雪おろしも、あのバイタリティでやるのでしよう。

山好きの娘さんがお嫁に来て、家族が増え、にぎやかになることと、もう一度来てみたいという願いを胸にして、帰りのバスに乗った。

き の この 味

吉 井 京 子

今年は、秋の野に学ぶ会の第一回目に参加させていただいた。

雨の心配のないよいお天気で、長岡方面を中心に入り、自然にとっぷり歩いた。「かたひら」をみつけた時は、思わず顔がほころんだ。

皆さんで取ったきのこを並べて、食用になるもの、毒きのこに分け、小日向先生からいろいろきのこのお話をお聞きし研修させていただいた。

お昼になった。みんなで、出来立てのきのこ汁の鍋を囲んで、フウフウいしながらいた。おわんの中に何種類のきのこが入っていたことだろうか。

お互いに味を出し合い、お腹の中に入りこむおいしさだった。

大きな鍋のきのこ汁は、たちまちみんなの胃袋の中に納まつた。

忙しい中、きのこや野菜を食べられるように用意されたのは、誰だろう。きっと、小日向先生御夫妻ではなかつただろうか。

紙をお借りして感謝申し上げます。

き の こ

脇 屋 ミヨシ

一年程前から、足を痛めて、案内状を頂きながら、心ならずも出席できずになつたが、杉の切り株に真っ白につかりながら、きのこがしに熱中した。思うように、きのこは見つけられなかつたが、杉の切り株に真っ白についた「かたひら」をみつけた時は、思わず顔がほころんだ。

皆さんで取ったきのこを並べて、食用になるもの、毒きのこに分け、小日向先生からいろいろきのこのお話をお聞きし研修させていただいた。

お昼になった。みんなで、出来立てのきのこ汁の鍋を囲んで、フウフウいながらいた。おわんの中に何種類のきのこが入っていたことだろうか。

食後、皆さん展望台へと登つて行かれけれど、足の悪い私は、二、三の方達と下で待つ事にした。そうこうしているうちに、少し上方から草が沢山あると、はずんだ声、悪い足を引きするように、急ぎかけつけてみて驚いた。

それはいつか、田子倉で車の中からあれがつきよ草だ、と教えて頂いたのとそつくりなのである。枯れかかった大きな木に無数に並んで生えているさまは、まさにあのつきよ草。頂上から降りていらつしゃつた先生は、その草を半分に切つて中にシミがあるので詳しく教えて下さって、やっぱり参加しました。

思い出の校長先生

福 島 正

今年は天候が不順だったこともあり、山野に出かけることが少なかつた。ちょうど、山から雪の便りが聞こえてくる頃になると、以前勤めた学校を思い出す。全校三学級の小さな山の学校である。

その校長先生は、穏やかで職員を大切にした。また、たいへん山好きでもあった。暇があると山に出て、春は山菜、秋にはきのこを採ってきて職員に振る舞つた。「マムシがいたからとつてきた」といつて、宿直室で焼いて職員に食べさせたりもした。きのこは山芋、秋にはきのこを採つてきて職員に食べさせたりもした。きのこ採りにはあまり職員を連れて行こうとはしない。連れて行つて、あまり取れないことは云うまでもない。

しかし、山芋堀にはよく連れていく。前もつて下見をし、あらかじめ芋の大きそうな蔓を選んでテープを結んでおく。そうすると天気が悪く、しばらく行けなくて蔓がとんでもしまつても、テレビを見んで掘つていく。しかし、そう簡単には掘れない。そういうふうに、校長先生は決まって大きなものを何本も掘つてきて、どうだばかりに広げるのである。最後にはそれを分けて頂く。山が好きになつた懐かしい思い出である。

原稿を寄せて下さった方々のお陰で今年もようやく「かしのみ 6 号」ができあがりました。

本当にありがとうございました。

来年はどんな植物の生きざまに出でます。

（小幡・池田）

編集記

会えるでしょうか。（小幡・池田）